

よみがえる宇沢弘文

写真は『週刊エコノミスト』3月3日号の特集。「世界の主流派経済学の第一線で活躍し、市場原理化する資本主義の危うさに1970年代から警鐘を鳴らし続けた。現実の経済社会問題に挑んだ希代の経済学者・宇沢弘文を再考する」

まずは、宇沢弘文の評伝『資本主義と闘った男』の著者、ジャーナリストの佐々木実氏が、「環境」を分析できる理論に挑み続けた経済学者の遺言である。

宇沢の同僚や教え子、友人に取材していて、あたかも宇沢弘文が2人存在していたかのような錯覚にとらわれることがあった。世界に認められた数理経済学者の“前期宇沢”と、社会共通資本論を提唱した“後期宇沢”。率直に言って、経済学者が宇沢を語る際、社会的共通資本の話題にはあまり触れたがらない。「世界のウザワ」と称賛されるのは、“前期宇沢”である。対照的に、経済学を専門としない人の多くは“後期宇沢”に関心を寄せる。

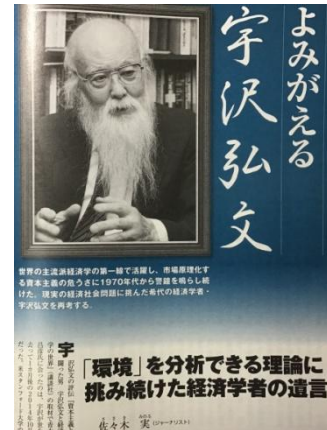
興味深いことに近年、世界の動向はむしろ、“後期宇沢”に近づいてきている。国連が唱えるSDGs(持続可能な開発目標)、投資家の行動を変えつつあるESG(環境・社会・企業統治)投資、深刻化する地球温暖化問題などをみれば明らかだろう。宇沢が社会的共通資本を着想したのは50年も前であり、地球温暖化の研究を始めたのは30年前だった。没後5年あまり過ぎてなお、宇沢経済学は色あせていない。資本主義が曲がり角にある今こそ、謎多き経済学者の全体像を描き直す時である。

“前期宇沢”と“後期宇沢”の境目は68年、シカゴ大学から東京大学への移籍だ。宇沢は、当時日本が直面していた社会問題、高度経済成長のひずみである公害と環境破壊を分析し、解決するための経済学を構想した。帰国直後をこう回想している。

「特に問題になったのが公害です。ところがそれまでの経済学は、自然や文化的社会的環境を理論的な枠組みのなかに取り込もうという努力をしてこなかったわけです。要するに、私有されないものはすべて公共財で自由に使ってよいという考え方が支配的でした。その時に非常に大きな影響を受けた書物が宮本憲一さんの『社会資本論』(有斐閣)でした」(『環境と公害』2001年冬号)

“後期宇沢”は、理論家であると同時に実践家だった。アフガニスタンで社会的共通資本の再建に尽力した中村哲医師との対談では、すっかり意気投合したものである。

本特集は次に紹介する宮本憲一先生、長男の宇沢達・名古屋大学教授、教え子の雨宮正佳・日銀副総裁へのインタビューなどが掲載されている。



(2020年3月5日)